
がんばれクロネコ海賊団

蒟蒻星人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

がんばれクロネコ海賊団

【Nコード】

N3353N

【作者名】

蒟蒻星人

【あらすじ】

キャプテン・クロに転生だか憑依だかしてしまった男が、心の赴くままに海賊人生を歩む物語。

プロローグ（前書き）

こんな感じの二次創作です、感想・御意見あれば是非に……あ、なるべくソフトな感じでおねがいします。

プロローグ

東の海、イーストブルー。俗に最弱の海と呼ばれる所のある島からこの物語は始まった。

「クク……フハハ……ハ　　ハツハツハツハ！！！」

俺の目前には見事な木造の船、どこまでも注文通りで素晴らしい仕事と言える。長かった……実に長かった……！　大好きなラム酒を自重しメシのランクを落として海賊やら山賊やらを狩り続ける苦悩の日々、それは今報われたと言えるだろう。クロネコ型の意匠を施した船首に黒猫を意識して作られた海賊旗……この勇姿に勝る海賊船が他にあるだろうか。断言しよう、我がベザン・ブラック号はかのオーロ・ジャクソン号にもモビー・ディック号にも引けを取らない世界一の船だ！！

「キャプテン、物資の詰め込み完了したぜ！」

「出航準備も完了だ、いつでも出られるぜ！」

我が船の勇姿に見とれていると、一仕事終わらせた部下が声を掛けてきた。中々仕事が早いじゃないか、感心感心。俺は下がってきた眼鏡を掌でクイッと持ち上げ声のした方へ向き直ると、そこには痩せ気味の猫背な男と腹の出た筋肉質の男が立っていた。

「御苦労、ニヤーバン・兄弟。所でジャンゴの野郎はどこだ？　酒の買出しに行かせてから大分時間も経ってるんだが」

全く、どこで油売ってやがんだあのキノコ野郎……ぼちぼち出航だつてのに遅れやがったら戦闘訓練いつもの倍にしてやる。

「副キャプテンでしたら……あ、来ました！」

シヤムの指差した方向を見ると、後ろ向きでちまちま寄ってくる胡散臭い男が見えた。あの野郎……！

「……なあ、シヤム、ブチ。あの野郎はムーンウォークで歩かないと死んでしまう病でも罹ってるのか？」

俺の質問に苦笑する二人、その間にも我らが副キャプテンはムーンウォークで近づいてくる。腹立つな……最近調子乗ってるしこいらで俺の恐ろしさを再確認させてやるうか……。

「！ キヤ、キャプテン！ 出航前で逸る気持ちは分かりますが落ち着いて！ ビー・クール、ビー・クール！！」

「急げ副キャプテン！ キャプテンがキレて ちょっ！ <猫の手>は流石にヤバイですって……！」

必至に俺を宥めるニヤーバン・兄弟、その様子を見てムーンウォークをやめるとダッシュで走り寄るジャンゴ。はじめからそうすりゃいいんだ、ったく。

「今戻つたぜキャプテン……！」

「遅え！ そして酒はどうした！ なんで手ぶらなんだてめえ……！」

お使いもろくに出来ねえのかこの野郎……！

「いや、そいつは　お、来たか！」

「　あ？」

見ると、町の住民が酒樽担いで近づいてくる。しかし随分多いな、あんな量の酒を買う金なんか渡してなかったはずだが……。

「今までのお礼だとよ、タダでいってんだから気前がいいぜ」

訝しげな顔の俺に得意げに話すジャンゴ、しかしお礼か。この日の為に、賞金目当てで近海の海賊共や近くの山賊共を随分と締め上げたからな。町の治安もすこぶる良くなったし、その礼つてとこか。次々に搬入される酒樽を見ると、どれも中々の上物だという事が分かる。

「クロさん、あんたには随分と世話になったな。これはせめてものお礼じゃ、どうぞ納めてくれ」

そんな事を言ってくる町長の爺さん、くれるのはありがたいが……。

「俺らは海賊だぜ？　賞金目当てにこの辺の雑魚共締め上げはしたが　」

「　クロさんは町を襲うどころかそれから護ってくれた、海賊だろつが海軍だろつがその事に変わりはない」

俺の言葉を遮って告げる爺さん、それに町人が皆同意する……全く、

人が善過ぎるとバカを見るぞ。俺は懲りずに下がってきた眼鏡をク
イっと押し上げ、踵を返すと。

「 帆を張れ！ 碇を上げろ！」

指示を飛ばし、完成したての船に飛び乗る。いざ出航の時だ！

「 出航！！！」

俺の号令に万歳三唱で見送る町人達、海賊相手にする態度じゃねえ
ぜ全く。しかし、ようやく俺の海賊人生の幕を開けられるな。血の
滲むような修業の日々に爪に火をともしような儉約の日々ともおさ
らばだ、好き勝手に俺は生きる！ そうでなけりゃ、ワンピースの
世界に憑依だか転生だかした意味が無いってもんだ！！

第一話 いきなりの危機（前書き）

良いサブタイトルを付けられる才が欲しい……。

第一話 いきなりの危機

ワンピース、このコミックを読んでいつも思うのは俺もこんな世界で生きてみたいという事だった。悩みも無く大暴れして好き勝手に生きる、破滅的ではあるがそんな生活に俺は憧れていた。

だから、何の因果かこの世界に来たと分かった時は感激のあまり気絶しそうになったものだ、その後に俺が後のキャプテン・クロだと悟った時は別の意味で気絶しかけたが……。まあ、身体能力は前世と比べ物にならないし、何より俺には本来のクロには無い熱い想いがあったのでひたすら鍛えまくり今やスーパー・クロと成りつつある俺がいる訳であるが。

「キャ、キャプテン！ 何ボケっとしてやがるんですか！！」

「現実逃避してる場合じゃないですって！！」

……これが走馬灯って奴か、クソがあ！ 俺はクイツと眼鏡を上げて絶叫する。

「俺が一体何したってんだチクショウ！！」

現在我が船は海軍からの敵襲を受け逃走の憂き目にあっている……初航海でこの仕打ち、こんな中途半端な奴に転生させた件と合わせて神だとかいう奴がいるなら、そいつはきつと俺のことが大嫌いなのだろう。

「クソ！ なんであんな化物がこの最弱の海にいやがるんだ……！！」

そんなの俺が聞いてえよこのジャンゴ野郎が！ くっ、船足が向こうのが速い！ ……このままじゃ。

「拳・骨……」

俺の耳に野太い声が響く、敵船を見ると砲弾を握り締めた老人の姿……ヤバイ！

「隕石！！！」

空気を切り裂き我が船のメインマストを狙って高速で接近する砲弾、大砲で打ち出したよりも速いとかどんな筋力してやがるんだ！

「させるか！！」

俺は瞬時に愛用の武器>猫の手くを装着すると、メインマストを得意の移動術、抜き足で駆け上がり飛来するそれを切り裂く。

まだ着水してから一週間も経ってないんだぞ！ 俺の野望を支える世界一の船にこの仕打ち、許せん……。俺は下がって来た眼鏡をクイッと上げて我が船の頼れる副キャプテンに指示を飛ばす。

「ジャンゴ！ あのクソツタレにありったけのチャクラムブチこんでやれ！ 俺のベザン・ブラック号のメインマストへ砲撃する奴は、全身から血を噴出させて殺す法案が俺の中で可決した！！」

「無茶言つな！ 相手は海賊王を追い込んだ海軍の化物だぞ！ へタに手を出しや俺らは皆殺しだ！！」

わめくジャンゴ、そんな事は分かってるんだよ！！ けどあの野郎は俺の船のメイ ぬお！？

「よ、ようやく止んだ……のか？」

弾でも尽きたのか突然止まった砲撃の嵐、俺は抜き足で走り回って片っ端から砲丸を切り飛ばし、ジャンゴはチャクラムで、ニヤーバン・兄弟は鉤爪で応戦。奮闘はしたが、結局何発かは食らって船に穴が空きかけた。船大工の居ない我が海賊団、一番器用なシヤムに応急処置をやらせ浸水は防いだがヴィジュアル的な意味でダメージは深刻だ……おのれえ！

「やべえ！ 追いつかれるぜ！」

ジャンゴの言葉に敵船を見ればもはや敵船は目と鼻の先、追いつかれるのも時間の問題だ……こうなりゃ、やるしかねえ！

「俺はアレを足止めしてくる！ てめえらは船を護ってる！！」

「んな！？」

驚愕するジャンゴを尻目に俺は敵船に飛び移り、それに反応して海兵数人が迎撃にきた所を俺は両手に装着した猫の手くを振るって斬りつける。が、浅い。どいつもギリギリで致命傷を避けやがった、流石は英雄ガープの船員だ、良い動きしやがる……。ちっ、結構な数がいやがるな……。

「手配書じゃ見ない顔じゃが……何者じゃ？ 貴様」

「何者かも分からねえ相手に、あれだけの砲撃叩き込んだのかよ……」

銃を構えて俺を取り囲む海兵を押しつけて出てくるガープ、なんて無茶苦茶なジジイだ……こんな奴が中将だから海軍はアレなんだ。

「ふん、わしのあれを悉く防ぐような奴が賞金首になっておらんわけがないわい　この海に、平和の象徴たる東の海で何を企んでおる？」

とたんに雰囲気が変わり、発せられた何かによって眼鏡に輝が入る。これが覇気か……！　洒落にならん。ジジイになってこれかよ、全盛期はどうだったんだこの野郎。

「てめえの方こそなんでこんな辺鄙なとこに居やがる……最弱の海に伝説の海兵が何のようだ？」

そūdよ、なんでこんな化物がここにいるんだ……！　こいつにエソカウトさせしなれば、俺の船に残念な傷が出来ることも無かったのに……！！

「孫をわしの故郷に預けに行く所に貴様らの船が通りかかったのだ、せつかく良い所を見せようとしたのに、わしの拳骨流星群を全段防ぎおって……！！」

ぶるぶると覇気を込めた拳を振るわせるガープ……そんな自分勝手な理由で俺の船を傷物にしまったのかこの野郎！

「知るか馬鹿野郎！　もう許さねえ！　覚悟しやがれ……！！」

「やってみる青二才が……！！」

言い切ると放たれる剛拳。なにせ覇気の込められた拳だ、まともに

食らえば軽く吹っ飛びそうだが俺に当てるには少々遅すぎる。抜き足でそれをかわし、背後に移動すると猫の手くで真っ直ぐに心臓を狙う。伝説の海兵といえど老いたものだ、これで俺の名も跳ね上がるってもの。

「そこじゃー！」

「ぐお!?」

恐ろしい身のこなしで瞬時に振り向き正拳を放つガープ、あわててマトリックス的なブリッジでそれをかわし後方に飛び退いたが、どんな反応速度してやがんだこのジジイ!

「中々の速さじゃがまだまだ甘い、その程度か小僧？」

ニヤリと笑みを浮かべ挑発してくるガープ、上等じゃねえか。

「はっ！ 今のは俺の溢れ出るほどの敬老精神が刃を鈍らせちまった結果だ、もうジジイとは思わねえ、覚悟しやがれ!!」

再度抜き足で背後に移動、そこを狙いガープが拳を撃つがもはやそこに俺は居ない。考えてみれば真後ろというのは余りにもセオリー過ぎる、故に真後ろに抜き足で移動した瞬間に再度抜き足で背中へ移動。今度こそ捉えた!

「指銃>爪く！」

>猫の手くを真っ直ぐ伸ばしての突き。先ほどとは格段に上昇した速さと、鋼鉄の鉄板すら楽々突き破る威力を誇る俺の決め技の一つだ。

指銃と名は付けたが海軍関係者どころかそれと敵対してる俺が六式なんて覚える機会は無いので、重石を乗せての指立て伏せと熱した鉄砂に貫き手を繰り返す修業を永遠と行いそれっぽい物に完成させた。正直先ほどはジジイと侮ったが今度こそ終わり。

「甘いわー!!」

「はい？」

瞬時に振り返り、振り向き際に逆の拳であっさりと払われた俺の決め技。ちよっ、ヤバ。

「どりゃア!!!」

「!?!?」

腹部に走る爆発したかのような衝撃、自分から後方に飛んである程度和らげたが後頭部を強かに打ちつけ意識を失いそうになる

「ゴ……ハ……」

口内に広がる鉄臭い味、この感じじゃ内臓を痛めたのでは無く口を切ったのだろう。辛うじて立ち上がれたが、無視できるダメージとはいない難く戦闘などもつての他だ。とんでもねえ拳だ、修業積んでなきゃ生きてたかも怪しい。

「ほう、まだ意識があるか。全く年は足りたくないもんじゃ、最近パワーが落ちていかんわい」

ぶわっはっはっは！！と、大笑いするガープ……ちい、俺もまだまだって事か。こりゃ能力使っても無理だな、とくれば当初の目標通りにするか。すなわち 船の足止めだ。

「調子に乗って居られるのもこれまでだ……！」

眼鏡を取って胸ポケットに仕舞い、全身に力を込める。途端に変わっていく自分の体、原作のクロ以上と俺が断言出来る要素の一つがこれ、悪魔の実の能力だ。

「ほう、まさか能力者じゃったとは……」

短い尻尾に体毛、口元の長い髭に……頭部の猫耳。俺の食った実は動物系ネコネコの実、モデル・リンクス。何故か体毛が真っ黒なのは、俺がクロだからだろうか。

「目に物見せてやるぜ、海軍の英雄さんよ……」

ダラリと腕を下ろし、それを左右に揺らす。これはいわば自己暗示、揺れる毎に痛覚が薄れれ行き、すでに先程のダメージも気にならな

い。
「はん！ 虚仮威しでわしの首は取れんぞ青二才！！」

拳を握り締めて突貫してくるガープ、しかしもはや遅い！

「杓死」

「ぬ！？」

流石は英雄ガープ、今の俺じゃお前は手に負えない。故に。

「！ 舵が粉々に!?!」

「あぶねえぞ！ マストが倒れてきやがる!!」

船内で上がる海兵の悲鳴、ざまあみる。痛覚を消し、動物系の持つ潜在能力を完全に開放しての抜き足の連発。加速した視界にもリンクスの持つ動体視力で正確に得物を見分けることが可能だ。ふふふ、いかに優れた船と言えど、マストと舵が無ければ、まともには動くは出来まい。

「貴様！ よくもわしの船を!!」

先にやったのはてめえだろうが！ もっと力を付けたら必ずや船の仇をとってやる！

「次こそは容赦しねえ、首洗って待ってやがれクソジジイ!!!」
捨て台詞を吐いて船首から我が愛しの船に飛び乗る俺、今こそ好機だ。

「ジャンゴ！ 舵を任せたぞ！ ニヤーバン・兄弟はオールを持って！ 今のうちに逃げ切るぞ!!」

突然の俺の帰還に驚くも、能力を使って尚且つ口元に血が滲んでる俺の姿に只事ではないと悟ったのかどいつも行動は速やかだ。俺もオールを握ると全力で漕ぐ、このまま逃げ切れることを祈って。

「ちい、逃がしたか……！」

遠ざかる海賊船、湧き上がる怒りを抑えてそれを見送るガープ。船員の傷は大した事無かったが船は多大な被害を被り、さらに孫であるルフィが海賊の事を目を輝かして話すのがその怒りを加速させた。

「ガープさん、本部に問い合わせましたが……あいつの特徴に一致する手配書は存在しないようです」

「なに！？」

部下の報告を聞いても未だガープは信じられなかった。海賊で能力者、それもかなりの戦闘力を有している、そんな相手が未だ指名手配を受けていないというのは、このご時世ありえない事である。

「……何者なんじゃあやつは」

もはや豆粒ほどになった海賊船、応援を呼んだところでおそらく返

り討ちに会うだろう。伝説の海兵は苦々しくそれを見つめていた。

第二話 どうしてこうなった……。

「……まーだ残ってやがる、まあ下手したら風穴が空いてたかもしれんし、それに比べればまだマシな方か」

船長室に置いてある姿見には、腹部に拳程の紫色の痕が薄っすらと残っている俺の身体が見える。一週間ほど前にガープから受けた傷だが、もはや戦闘に支障は無いとは言え痛いものは痛い。しかし、こう改めて自分の身体を見ると……。

「やっぱこう、いいよなあ」

適度な筋肉の付いたしなやかな身体に無数に刻まれた男の勲章、前世の微妙なマイボデーとは比べ物にならない。海賊は常に死と隣り合わせ、幼少時より鍛え上げた身体はどんな財宝にも変えられない俺の財産だ。

「これでもうちよいフェイスが良ければなあ」

クイツと眼鏡を上げ、口元を歪ませて笑みを作ると姿見の向こうにものっそい悪どい笑みを浮かべた自分が居る。この身はキャプテン・クロ、悪人顔なのは分かっていたがなんともままならないものだ。

「うーむ、もうちょっとこう……柔らかかどかつクールな感じに」

「おーい、ボチボチ港に……なに鏡の前でニヤニヤしてんだキャプテン、おまけに上半身裸で」

！？こ、このアホが！

「ノックをしると何度も言っただろうが腐れジャンゴ野郎!!」

「ぶばあ!?!」

思わずテーブルの上に置いてあったまだ中身の入った酒瓶を投擲、それを顔面に食らい倒れ付すジャンゴ　　ついやっちゃまった……もつたいねえなあ、おい。

「ちゃんと片付けて拭いとけよ、俺は酒くせえ部屋で寝るのはゴメんだ」

クイツと眼鏡を上げると上着を着て、部屋を出る。「あ、あんたがやっただろ……」

なんて息も絶え絶えな副キャプテンの声など、俺には聞こえんね。

「あ、キャプテン！　俺らニヤーバン・兄弟、戦闘準備は万全です
!!!」

「本当にご愁傷様とかいえねえぜ全く、俺らに狙われちゃうなんて
よう!」

ふふふ、頼もしいぜ。こいつらとジャンゴは仲間に引き入れた時から俺主導のキッツイ戦闘訓練をやらせている、一部の化物には手も足も出ないが……たかがちっぽけな村一つ、相手にするのは赤子の手を捻るようなもんだ。
しかし。

「シモツキ村か、どっかで聞いたような気がするんだが……」

なんかわりと重要な村だったような？ うーむ……。

「気のせいじゃねえか？ なにせ海軍基地も無えど田舎だ、話に聞くと自警団みてえのが居るらしいが」

掃除を終えたジャンゴが気になる情報を持ってくる、しかし自警団ねえ。

「どうせ村人に毛が生えた程度だろ？」

「なんでも全員村の道場の門下生らしいが、そんな所だろうな」

そんな奴らに俺らクロネコ海賊団が遅れを取るとは到底思えない、抵抗なんぞ無意味ってもんだ。

「キャプテン！ 島が見えたぜ！」

シヤムの指差した方向を見ると、小規模な島が目に入った。惨劇の始まりだ、覚悟しろよ村人共。

「裏手に船を付ける！ 総員戦闘準備！」

指示を飛ばす。今宵 まだ昼か 今昼の>猫の手くは血に飢えている……しまらねえなこれじゃ。

「……やっぱり覚えがあるなこの村」

ちらちら見かける松の木に瓦屋根の家、前世では田舎暮らしだったので懐かしいものがあり、そのせいかも知れないが……。

「まだ言ってるのかよ　とと、あれだ」

民家よりも大きな作りで中から聞こえるパンパンと響く竹刀を打ちつける音、ここか。

「馬鹿な村人に感謝ですねキャプテン」

「ああ、まさかあっさり教えてくれるとは」

ニヤーバン・兄弟のいう事はもっともだが、それは仕方ないだろう。こいつらのネコ被りは恐ろしくうまい、善良な村人がそれに気付くのは無理ってもんだ。

「キャプテンじゃ無理な芸当だな、その悪人顔じゃネコの被りようがねえ」

！？　こ、この野郎……ジャンゴの分際でなんてコトヲ。

「ああ、キャプテンじゃ無理だな」

「おう、滲み出る悪人オーラではれちまう」

ぶ、ブルータス！ 貴様らもか！！

「余計なお世話だアホ共！！！」

「くわわ！？」

指銃の速度でバカ三人を殴り飛ばす、こっちだって気にしてるんだよチクシヨウ！！

「とっとと行くぞ！ このフラストレーション、道場の奴らにぶつけてやる……」

クイツと眼鏡を押し上げると、ドアを蹴りでブチ開け中へ入る。まずは道場主を血祭りに上げるのが筋ってもんだな、それなりに使えと俺としてもやり応えが む？

「キヤー！！！」

周囲に響く悲鳴、何かと声の発信源に抜き足で移動すると、足を踏み外したのか階段から落下してくる少女。ちっ！

「いよっ」と

「きゃっ」と

流石にガキを見殺しにするのは後味が悪いと、思わず受け止める。これから略奪しようって奴のやる事じゃないのは分かっているが……ん？　なんかどっかで見たような顔。

「　　くいな!？」

血相変えて出てきたのは眼鏡をかけた道着姿のオッサン。そうそう、くいなだ。確かにたしぎに瓜二つだ、このまま成長すればあんな感じに……って、くいな!？

「何者だ!？　私の娘に何をした!！」

竹刀を構えこちらを睨みつけてくるオッサン、このガキがくいなって事はこいつはゾロの師匠か！　シモツキ村……なんか覚えがあると思ったらゾロの故郷じゃん！　となるとやり辛いなあ、おまけに結構使うぞこのオッサン、さてどうする。

「待ってお父さん!！」

「くいな!！」

へ？

「この人は階段から落ちた私を助けてくれたの！　あのまま落ちたら、私は死んでたかもしれない!！」

まあ、原作じゃそれが死因だしな。頭から落ちてたしビックリ人間だらけのこの世界でも、さほど鍛えてないくいなじや助からないわな。しかし、それで納得する訳が。

「……まさか娘の命の恩人に剣を向けるとは、私もまだまだ修業不足ですね」

おい!?

「この度は、娘の命を救っていただき真にありがとうございます」

追いついたジャンゴとニャーバン・兄弟共々自己紹介をすると茶の間に通され、深々と頭を下げられる。ナニコレ。

「……どうなってんだこりゃ?」

状況が理解出来ず戸惑うジャンゴ、ちなみに全員郷に入れば郷に従えと正座している。

「……何したんですかキャプテン?」

「……めっちゃ感謝されてるじゃないですか、マジにどじすりゃいいんです?」

「……俺が知りてえよチクシヨウ」

小声で話す俺ら、もう嫌。

「あ、どうぞ召し上がってください！ ここのじゃ一番良いお茶葉にこの村で一番人気のお菓子なんです！」

ニコニコ笑顔でお茶とお菓子を進めるくいな、断る理由も無いので取りあえず茶を啜る。

「……うまい」

緑茶は湯の温度が命、熱すぎると香りが飛ぶし温すぎると香りが引き立たない。茶葉も良いものだし、前世ではこんなうまいお茶飲んだ事無かったな。

「うお、うめえなこれ！ もっとねえか！？」

あつという間に出された茶菓子のどら焼きを平らげお代わりを要求するブチ、この野郎俺に恥を掻かす気か？

「てめえは何厚かましい事ほざいてやがんだ！ わびさびつてものを理解しやがれ！」

「だってキャプテン、これうめえんだよ！ あ、食わねえんなら俺が」

「……俺のどら焼きに手を出して見ろ、そんな時やてめえの首と胸が泣き別れだ」

瞬時に、猫の手くを装着し、ブチの首に当て、クイツと眼鏡を上げて言う。青褪めて硬直するが俺の茶菓子に手を出そうとしたんだ、正当な報いといえるだろう。

「まあまあ喧嘩しないで、茶菓子はまだありますからお好きにどうぞ。今持って来ましょう」

「む、申し訳ない」

席を立つオツサン、全く船に戻ったらこいつに日本の心を叩き込んでやらねばな。そう言っつて、猫の手くをはずそうとすると、物珍しそうな目でくいなが見つめていた。

「こいつが気になるか？」

「はい、見せて貰ってもいいですか？」

別に企業秘密という訳でも無いので脱いで渡す、確かに珍しくはあるだろう。

>猫の手くは俺、というか原作のクロが使っていたオリジナル武器だ。毛皮の手袋の先に爪のようにサーベルの付いた特殊な武器、原作じゃあっさり折られていたが、俺はかなりこいつを拘って製作した。爪の一本一本を鍛冶屋に頼んで精魂込めて打って貰い、手袋部分にしても、手に入る中で最も強靱な毛皮を使って製作したのだ。

「こんな武器、見たこと無い……」

感心するよつに言っくいな、そりゃそうだろうぞ。

「気をつけるよ嬢ちゃん、そいつはキャプテン以外使いこなせねえからな。俺も使ってみようとしたら、あやうく腕を斬りおとす所だった」

「確かに……こんな武器、使いこなすにはかなりの修業をしないとジャンゴの失敗談を聞いて同意するくいな、十分見たのか礼を言って手渡された。

それは正しい認識だ。俺の腕には無数の痕があるが、それはほとんどが猫の手くの使い方を誤って付けたものだ。特に大雑把な動きならまだしも、精密な動きをするには指に力が無いと不可能だ。しかし、扱い辛いが使いこなせばこれ程頼りになるものは存在しない。

「所でこんな武器を持つてるって事は……クロさん達は海賊なんですか？」

「……」

思わず見詰め合う俺ら、いや海賊だけどもさら告げ辛い……。茶菓子をこ馳走になった手前、今更略奪つてもなんだかなあと思うし。

「あ、大丈夫です。海賊は海賊でもクロさん達は良い海賊なんですよね、確か……そう！ピースメインって言うんでしたっけ！」

……あー、確かワンピースの作者の読み切りでそんなのあったなあ。町で略奪を行うのがモーガニア、それから略奪して冒険するのがピースメイン……どっちかって言うと俺らは前者なんだがなあ、まだそんな事してないけど。

どう言おうか悩んでいると、唐突にジャンゴが口を開いた。

「そ、そうだぜ嬢ちゃん！　なあ！　ニヤーバン・兄弟！」

は！？

「おう、俺らは世の為人の為悪逆な海賊どもを狩り続ける正義の海賊よ！　なあ、ブチ！！」

「あたぼうよ！」

ネコを被ってビシッと言い切るニヤーバン・兄弟。ポーズまで取っちゃってまあ……今まで資金集めに海賊に山賊狩まくってたから、間違いつて訳でもないが。

「……まあ、この辺はちょっと秘密にしといてくれ。村人に知られれば海軍呼ばれかねないからな」

「はい！　絶対に誰にもいいません！」

うう、いたいけな少女を騙すつてのはこう鳩尾にズンツと来るな、ネコを被り慣れてるニヤーバン・兄弟は平然としているがジャンゴは似たような感じだ……こりゃとつとずらかるに限るな。

「それじゃ、茶もご馳走になったしここらで失礼しよう。うまい茶だった」

腰を上げる俺ら、ここに居座るのは流石に良心が痛い。

「えー！　もう行っちゃうんですか！？　お話も聞きたかったのに

……」

心底残念そうに言うくないな……そ、そんな上目遣いでお兄さんを見ないでくれ！ 助けを求めて頼りになる船員に目を向けるが、皆一斉に目を逸らしやがった。どうしようか悩んでいると。

「そうですよ、まだ大したおもてなしも出来ていませんし……そう
だ！ 泊まっていかれてはどうです？」

茶菓子を持ってきたオッサンの発言に目が点になる俺ら、くないなも目をキラキラさせているしどうやら選択肢はないようだ。 なんと
こうなるかなあ……。

第三話 やりたいよじにやる。(前書き)

なんか妙に熱い？展開なつてしまった……。
こんなはずじゃ……。

第三話 やりたいようにやる。

「……………何してんだ俺」

雑巾を持って立ち尽くす俺、予定では村へ襲撃をかけ金品を巻き上げ意気揚々と立ち去るはずだったのだが……………。

「何してんですかキャプテン！ 急がねえと昼飯に間に合いませんよ!?!?」

道場の床にせかせかと雑巾をかけながら言うシャム、力の源である昼飯を食いつ逸れるのはゴメンだな。

「わりい!」

腰を落とし大人しく雑巾をかける。労働は尊いものだ、それに一仕事終わった方がうまく飯が食える。

「……………何か違うねえか?」

揃って昼飯

和食中心でおいしく頂いた

を平らげ食後の茶を

啜る俺ら、そこはかたなく感じた違和感から呟いた一言に、我が船員は首を傾げている。

「いやあ、クロさん達には大助かりですよ。しかしすいませんね、掃除なんか手伝って貰っちゃって」

「構わねえよ、キャプテンの地獄の戦闘訓練に比べりゃ楽過ぎるってもんだ。なあ！ てめえらー!!」

「「おう!」「」

ニコニコしながら言う道場主のオッサンに同じくニコニコしながら返答する船員……原作じゃイロモノだけど無法者の海賊っぽかったのになあ、こいつら。

「あ、クロさん！ この後お暇でしたら私の修業に付き合っただけ欲しいんですけど……いいですか？」

「え、いや……」

なんでこの俺がガキの修業に付き付き合わなきゃ　ぐ、その上目遣いは卑怯だ！ それにてめえら！　何その責めるような目！

「……わ、分かった」

うう、なんでこうなるんだ……。

ここ、シモツキ村へ来てから既に三日程経った。予定では一泊して早々に発つはずだったのだが、ここで問題が発生した……それは船の修理。

ガープの非常識な砲撃を食らった我が愛船、継ぎ接ぎな外見じゃ締まらないと修理を村の船大工に依頼したら、一週間程かかると言われたのだ。いずれはこの東の海から偉大なる航路へ進む予定の我が船だ、急がせて適当な修理をされるのも堪らないとそれを受け入れることにした。

それを聞いた、くいなとコウシロウさん　道場主のオッサンの名前　にウチには是非泊まってくれと言われたのだ。

さすがに悪いと断ろうとしたが、妙に頑固な二人を説得出来ず、結局逗留する事となった。

それで無駄飯を食うのもアレだと道場の掃除やら手伝っているのだが……何か違うないだろうか。

「やった！　あ、もう一人居てもいいですか？　私の幼馴染なんですけど」

「……構わんよ」

もうどうにでもなれ、ガキが一人や二人増えようが……待て、幼馴染？　それって。

「てめえがくいなの言ってた奴か」

「……」

道場近くの空き地、くいなが連れて来たのは腰に二本の竹刀を提げ、髪を短く刈り込んだ目つきの悪い少年……そうだよな、くいなの幼馴染って言ったらこいつ、ロロノア・ゾロだよな。

「くいなを助けてくれたんだってな、ありがとう」

ぺこっと頭を下げるゾロ。そっぴや変な所律儀なんだよな、こいつ。

「何、大した事じゃ」

「けど、俺は自分より弱い奴からモノを教わる気なんて更々ねえ！」

言い切ると同時に腰の竹刀を抜いて撃ちかかって来るゾロ、やるねえ。

「ゾロ！」

それを見て非難の声を上げるくいな。流石は未来の一億の首、大人顔負けの剣速に鋭さではあるが。

「俺を試すには十年早えぞクソガキ」

「!?!」

抜き足で背後に回ると首筋に>猫の手くを添え、眼鏡をクイツと上げる。何をされたのかも分からず呆然とするゾロ、将来は兎も角この時点じゃ俺の足元にも及ばない。

「嘘、ゾロがあんな簡単に後ろを取られるなんて……」

信じられない様子のないな、しかしなあ……。

「世の中には俺なんか比べ物にならない程の化物なんて……腐る程いるぜ?」

あのクソジジイとかな、いつか絶対膾に斬り下ろしてやる。

「てめえ一人じゃ話にならねえ……くいな、お前も来い。そしてサ
ービスだ、俺は一切手を出さねえでやるからガンガン打って来い」

>猫の手くを放り投げ挑発すると真剣な顔で竹刀を構えるゾロとく
いな……どれ、ちつとばかり遊んでやるか。

「ゼエ……ゼエ……」

「はぁ……はぁ……」

膝を付いて息を荒げる二人、こいつら本当にガキか？ ポケットから懐中時計を取り出し時間を確認するともう三時間程経っている、どんなスタミナしてやがんだ。

「い……一発も当てられなかった……」

「わ……私も……」

意気消沈する二人、すばやさが売りのキャプテン・クロがガキに攻撃貰うわけにはいかんだろう。

「そもそもズルいんだよ！ なんだよあれ！」

喚くゾロ、あれって言うところ。

「……これの事か？」

抜き足で二人の背後に移動し声をかける、もう幾度と無く見せたので驚かない二人。ちよつと残念。

「はい……何ですかそれ」

何ですかって言われても、抜き足ですとしか言えないな……。てか序盤のルフィはあっさり対応出来てたから、君らもその内見切れるんじゃない？ 俺のは若干>剃くを混ぜてるから分らんけど。ま、別に秘密って訳でも無いしいいか。そのうち嫌でも知る事だし。

「こう……だな、瞬時に地面を数回蹴って」

わざわざ音を立てて地面を蹴り。

「その勢いで移動する」

再度二人の背後に移動する。ちなみにこれはあくまで剃のやり方であって、抜き足は音を立てない。俺の靴はその為に靴底が柔らかい毛皮で出来ている。

「出来ねえ！」

「あんな速さで踏み込むなんて無理よ！」

真似をしようとするが、ただ地団太踏んでいるだけの二人。そんなすぐに出来たらCP9が涙目だ。

「そう簡単に出来るわけあるか、修業あるのみだ」

不貞腐れる二人の頭をガシガシと荒っぽく撫ぜる、俺も最初はそんなもんだったしな。

「キヤプ　おっと、クロさん！　コウシロウがおやつ時間だつてよー！」

「お、そうか。それじゃてめえら、今日はこの辺にしとくか」

>猫の手くを回収しにくいなどゾロ、そして呼びに来たジャンゴ共々道場へ向う。しかし、やっぱり何か違うよなあ……。

「……なあ、海賊つてなんだ？」

「あ？」

突然の質問の意図が分からなかったのか、生返事を返すジャンゴ。

おやつにおはぎとよく冷えた麦茶をいただき、道場の縁側でぼーつと外を見る我らクロネコ海賊団。ちなみに膝の上にはゾロとくいな
の頭が乗っている、二人とも疲れたのかお昼寝のようだ。

「こつ、なんか違うだろこれ。もっとこつ、ラム酒をガブガブやりながら町を恐怖のどん底に突き落とすというか……さあ?」

「……どこの大魔王だ」

なんとも言えない目でこちらを見てくるジャンゴ、ちつ。これだから馬鹿は困る。

「てめえなら分かるだろ? ブチ、シヤム」

「えーと、つまりラム酒飲んで大暴れしたいんですか?」

「それなら船から取って来ますけど、それと暴れるならなるべく人の居ない所をお願いします」

「……使えねえ」

馬鹿ばかりだ……なんかこつ、縁側でまったりする海賊って違くないか? いや別にこつしてるのが嫌いな訳じゃ。

「た、大変だ!!」

ん?

「どうしましたか?」

突然の悲鳴じみた声に跳ね起きるくいなとゾロ。ふと見ると、腕から血を流しているオツサンが血相変えて道場に駆け込んで来た。コウシロウはそれに対応するが、何かあったのか？

「か、海賊だ！ 海賊が村を襲撃しに来たんだ！！」

「なんと……！！」

驚愕するコウシロウ、しかし海賊か。こんな小さな村襲ってどうす

俺らも人の事言えんな。

「コウシロウさんも来てくれ！ 俺らで応戦してるんだが齒が立たねえ……なんでも一千万ベリーの首らしく、このままじゃ村が……！！」

俯くオツサン、コウシロウは決意を込めた目でそれに頷いた。

「分かりました、今向います。クロさん、ゾロ君とくいなを頼みます」

刀を腰に差して駆け出すコウシロウに、ゾロも二本の竹刀を手に駆け出す。

「待てよ先生！ 俺も戦える！」

この馬鹿！ なに考えてやがんだ！！

「馬鹿野郎！ ガキに何が出来るってんだ！」

「うるせえー！！」

とっ捕まえると振りほどこうと暴れるゾロ。未来のこいつならこの海海賊程度余裕で撃退出来るだろうが、今のこいつじゃどうやっても無理だ。

「嬢ちゃん！ やめとけ！」

「離してください！」

くいなの方も、刀を取って走り出す所をジャンゴに捕らえられていた。

ちっ、こうなりや……仕方ねえ。

「うお！？」

手を離すと勢い余って顔から地面に突っ伏すゾロ、それを見て皆目を丸くする。

「ジャンゴ、そいつを放せ」

「え？ キャプテン？」

「……別にためえらの為でも、ましてや村の為でもねえ」

口を告ぐんで真っ直ぐ俺を見るくいなどゾロ、相変わらず計画通りに事が進まないがもうどうでもいい。

「総員！ 戦闘準備！」

俺がワンピースを好きだったのは、キャラクターが皆自重してなか

ったからだ。だからこそ、俺はこの世界でやりたい事を好き勝手にやる。その為に俺は海賊を目指し死ぬ気で体を鍛えてきた。

そう、別にこれは他人なんかの為じゃない。俺がやりたいからやるだけだ。すなわち 俺の為！

「ちんけな雑魚海賊共にクロネコ海賊団の恐ろしさを教え込ませてやれ!!」

俺の指示に船員達は一瞬驚くと、ニヤッと笑い。

「「「おう!!!!」」」

腹の底から声を出した。

第四話 俺の二つ名を……呼ぶんじゃねえ!! (前書き)

いつの間にやらPVにユニークアクセスが素敵な事に！
お気に入り登録してくださった皆様に感謝です！

第四話 俺の二つ名を……呼ぶんじゃねえ!!

逃げ惑う村人にそれを追う海賊、家には火が付けられ辺りを紅蓮に染めている。大した抵抗も出来ねえ村人にここまでするか？　そもそも家を焼く必要なんて　　そうか、見せしめって奴か……くだらねえマネをしやがる。

「！　お父さん!!」

「先生!!」

見ればコウシロウが海賊共と交戦していた。息は荒く所々から血を流して居るが、戦意は衰えていない。見渡してみると、刀を構えた村人達　　恐らくはコウシロウの門下生だろう　　が、海賊の迎撃をしているようだ。しかし多勢に無勢だな、おまけにピストルなんぞ構えてやがる、コウシロウも結構使うが少々ヤバいか。

俺は>猫の手くを装着し、コウシロウが相對している敵の首をすれ違い様に跳ね飛ばす。降り注ぐ返り血を浴びて驚いた顔をするコウシロウ、恐らくその道着は二度と着れないだろう。

「まだそこまで酷え事にはなってねえか　　ジャンゴ!」

「おうよ!」

名前を呼んだだけだが、俺の意図を感じ取ってチャクラムを両手の人差し指に嵌めてクルクルと回す。

俺がこいつを副キャプテンにしているのは、原作遵守とかそういう訳では無い。

ハート型の眼鏡に胡散臭い行動から一見アホに見え　いや、中味も正真正銘のアホだが決してただのアホでは無いからだ。大きな差があるとは言え　。

「うらあ!!」

うちの船では俺に次ぐ戦闘力を有している。あと海図とか読めて眼鏡のお手入れとか出来たりする。

「うあ!？」

「ぐは!!」

所々で上がる悲鳴、ジャンゴの指を離れたチャクラムが次々に敵を切り裂き、火が燃え移らないように火のついた住居を破壊して行く……これで普段がもうちょいマシなら、言う事無えんだけだな。

「なんだてめえら!!」

いかにも船長っぽい帽子とマントを羽織った奴が大声を上げる、あれが主犯か。

この村に先に目を付けたのは俺らクロネコ海賊団、つまりここは俺のシマだ。それを……。

「てめえらこそ何だ……俺のシマに手を出すなんていい度胸してるじゃねえか、なあ？」

ドスの利いた声を出すとピタリと止まる喧騒、村人は兎も角海賊のクセにこの程度の殺気にびびるなんて三流の証拠だ。

「……なあ、いつからここは俺らのシマになったんだ？」

「……さあ？」

「……俺は知らないですけど」

ほ……ほんつつつとつにこいつらはよお……！！

「うるせえボンクラ共……！！」

この場面でそういう事言うか！？ 救いよつ無いアホ共があ……！！

「くつ……や、やっちまえてめえら……！！」

硬直が解けて、部下へ指示する三流。三流の指示を受け、それまで静止していた雑魚が一斉群がって来る……俺が相手をするまでも無いな。

「シヤム！」

「応！ てめえら雑魚共にキャプテンが出張るまでもねえ！ このクロネコ海賊団、船番兼突撃隊長！ ニヤーバン・兄弟シヤム様が相手してやる！」

「……いつも真っ先に突撃するのはキャプテンだけだな」

名前を呼ぶと、俺の>猫の手くを模した手袋に鋭い爪の付いた武器を装着したシャムが名乗りを上げて突撃する。そしてジャンゴ、てめえは余計だ。

「うおおおおおおおおおおおお！！」

勇ましい声の割にヘッピリ腰でドタドタ駆けて行くシャム……相変わらずだな。

「おい！　なんであんな奴に行かせたんだよ！」

それを見て俺に突っかかってくるゾロ、そりゃ見た目通りに受け取りゃそう見えるだろうな。

シャムの様子を見て口先だけの雑魚と勘違い殺到する三流共……しかし、それはあくまで見せかけだ。

「ぐあ！？」

「げふっ！」

シャムの爪で切り裂かれ倒れ付すアホ共、タチ悪いな相変わらず。

「ありゃシャムの得意技、ネコ騙だ」

唾然とするゾロ。セクシー・コマンドーじみたあの技、実力を計れない奴にはやたら効果的だ。

「くそっ！　これでも食ら　え？」

「お、俺の銃が！？」

戸惑う相手に、シヤムはニヤリと笑う。

「何かお探しかい？ 俺はちつとも知らねえがな……」

両手に大量のピストルを持ったシヤムがシラつと答える。

「いつの間に……」

驚いたような呆れたような声を洩らすくいな。

ネコババ、これもシヤムの得意技だ。

「ま、俺にはこんなオモチャ必要ねえがな」

ポイツと後ろに放り投げるシヤム。手荒に扱うなよ、後で回収して売ろうと思ってるんだから。

「く……」

「こいつ、結構やるぞ……」

奇抜すぎるシヤムの技に、たじたじになる敵の海賊。しかし弱いな、これで1000万か？

「くそつ！ 使えねえカス共め！！」

吐き捨てるように言うと、腰から二挺のピストルを抜いて前に出る
三流船長。

そう来るか、なら。

「それじゃ、いつちよ大将戦と行こうじゃねえか。下がれ、シヤム」
眼鏡をクイッと上げて、シヤムを下がらせる。ちなみにこの眼鏡は伊達だ、いわゆるファッショングラス。

「お遊びもここまでだ……。冥土の土産に教えてやるぜ、俺は”ビリー”。“二挺拳銃”のビリー・ギャレット様だ！」

胸を張って、自信満々に名乗りを上げる三流船長。それを聞いてざわざわする村人達、えーっと……。

「知ってるか？ ジャンゴ」

「あー……数日前にそんな手配書が届いたような気がするな、詳しくは知らねえが」

「って事はどうでもいい奴だな、原作でも聞いたことないしモブその1つてどこか。」

「せつかくだ……。てめえも名乗ってみるよ。どうせ聞いた事もねえ、ド三流だろうがよ」

それはてめえだ、何キザつたらしく言ってくれちゃってるわけ？
しかし、これは俺の忌々しい二つ名をデリートするチャンスだな、慎重に考え抜かねば……。えーっと、“閃光”……は黄猿と被るか
らボツ、“疾風”……はありきたりだ、いつそ原点回帰で“百計”
あたりに。

「なに悩んでるんだキャプテン？ あんたには“無計”のクロって言う立派な二つ名が」

!?

「その名前で俺を呼ぶんじゃないやねえ!!!!!!」

ズルリと下がった眼鏡をクイツ！　っと押し上げる。こいつには学習能力が欠如しまくってる！　あれほど言ったのに!!!

クロネコ海賊団を立ち上げたはいいが、船やら必要物資やら買う金が無かった俺ら。手っ取り早く金を稼ぐ為に、賞金稼ぎの真似事をする事にした。

リアル・クロならそれこそ驚く程の悪知恵を駆使してもっと効率よく稼ぐのだろうが、残念ながら俺にそんな頭は無い。

何も考えず、中古で買った小型ボートで海へ繰り出して正面から海賊を叩き潰していたら、いつの間にかそんな不名誉な二つ名で呼ばれるようになった。

……今の聞かれて無いよな？　大丈夫だよな!?

「む…… “無計”のクロ!?　あ、あの賞金稼ぎの……」

……バッチリ聞いてやがった。あんのドベジヤングめ！　副キャプテンから降格させて便所掃除係にしてやるつか……!

「あ、あれがああの“無計”か……」

「や、やべえよ。“無計”の相手なんて無理だ……」

む、“無計”“無計”と連呼しやがってクソ共があ！ どうせ俺は無計画だよ！ 行き当たりバッタリだよ！！ 悪かったなチクシヨウ！！！！

「ふ、ふはははは！！ こんなチンケな村も襲ってみるもんだ！ てめえをブツ殺しや俺の名も賞金額も跳ね上がるってもんよ！！」
なにやら物凄くやる気になったビリー、この実力差に気付かねえ時点で勝負は付いてるんだがな。

「食らいやがれ！！」

二挺のピストルが俺目掛けて火を吹く。頭に心臓か、狙いは正確だが、だからどうしたって所だ。普通なら抜き足でかわすところだがギャラリーに当たると悪いので、>猫の手くで地面に叩き落とす。

「終わりか？」

これで1000万？ 海軍の基準が分からん。

「んなわけねえだ ろつと！」

突如見当違いの方向へ銃口を向けると連続して発砲する、やけにでもな おお？

「くたばれ“無計”！！！！」

見当違いの方向へ撃った弾丸が瓦や道端の小石等にぶつかり、それぞれ軌道を変えて俺に向って来る。跳弾か、中々味なマネをする。

「クロさん！」

「危ねえ！」

俺がヤバイとも思ったのか声を上げるくらいなとゾロ、それを見て我が船員達はやれやれ首を振っている。

まあ、この程度でやられるなら。

「で、終わりか？」

もう何回死んでるか、分からんな。

「な……！？ て、てめえ！ 能力者だったのか！！」

ネコネコの実、モデル・リンクス。このリンクス、すなわち大山猫は非常に鋭い視力を持っており、俺が能力を使うとそれこそこんな芸当も出来る。

相手に見せ付けるようにく猫の手>の爪の部分で掴み取った銃弾をパラパラと落とす、我ながら器用なもんだ。よけるだけなら生身でも出来るが、それでは面白みが無いってものだ。

「……………」

絶句する二人、君らも将来は全弾斬り飛ばすくらいは出来ると思っがね。

「う　　うわああああ！！！！」

自分の中では最高の技をあっさり破られ悲鳴を上げるも、再度跳弾を放とうとするビリー。俺に喧嘩売るには、賞金額が一桁足らなかつたな。

リンクス化した俺の抜き足は今までの比ではない、音を置き去りにしてビリーの真後ろに立つ。

「　　いけね、殺っちゃ賞金額が三割ダウンだったな」

四肢と首のパーツ事にバラバラになって崩れ落ちるビリー、辺りはシンと静まり返っている。

「　　で？　次はお前らか？」

殺意を込めて一瞥すると、奇声を上げて船に猛ダツシユするビリー一味。俺らから逃げようなんて、何甘い事考えてんだか。

「ブチ！　フルパワーでブチかましてやれ！！」

「おう！！」

追いかけるブチ、恐怖から限界を突破したのか異常な速度で船に乗

飛びついてくるくいなにゾロ、ナニコレ？

「皆さん！ 我らの英雄を、このまま海に送り出してはシモツキ村末代までの恥です！ 今日には飲み明かしましょう！！」

コウシロウの演説に盛大な賛成の怒号を上げる村人達……締まらねえな本当。

「……うん、辛口でいい喉越しだ」

単品で飲むならラムが勝るが、こうして食事をしながらだとこちらに軍配を上げざるを得ない。

「アホ共め……」

見れば、急造のお立ち台の上で踊り狂うジャンゴに胡散臭い武勇伝を大げさな身振り手振りで村人に聞かせているニャーバン・兄弟……やっぱ違うようなあ。

俺の中での海賊は、麦わら海賊団のようなものでは無くもつと無法者な感じだった。気に入らない奴は斬り殺して鯨のエサにし、村や町からは略奪三昧……そんなイメージだ。それなのに……なんで俺は村人総出で歓待受けてんだ、嫌われ者だろっ海賊は。

「騒がしい所はお嫌いですか？」

酒瓶を持って現れるコウシロウ、別に嫌いって訳じゃなくむしろ好きなんだがどうにもなあ……。

「どうぞ」

「すまん」

空いた杯に酌をするコウシロウ、口を付けるところちらも中々いい酒である事が分かった。

「しかし驚きましたよ、まさかクロさんがあの“無計”だったとは」

「……その名は呼ばないでくれると助かる」

あのハート眼鏡野郎めえ！ いつもいつも余計な事言いやがつて！ 俺に恨みでもあるのか！？

「おや、どんな相手だろうが計略を用いず正面から叩き潰す、故に

“無計”。私はそう聞いております、中々勇猛な二つ名だとは思いますが」

「……それも取れるか」

悪くないな、そう考えると“無計”も悪い二つ名じゃ無いかも知れない。

……しかし、どうも“無計”なんて言われると戦略も立てられない突撃馬鹿と言われている気がして腹が立つのも事実だ。

「お気に召さないのであれば、あえて口に出すのは止めることにしましょう……それよりも、クロさん方はやはり“偉大なる航路”を目指して航海をしているのですか？」

“偉大なる航路”、それは東西南北の海の常識が一切通じないイカれた季節・天候に支配された海。実力のある海賊は皆ここを目指す、それは“ひとつなぎの大秘宝”がその海の果てにあると言われているからだ。

「いずれは……な」

やはり、この世界へ来たならば“偉大なる航路”へ入らない手は無い。しかし今すぐに入るのは自殺行為だ、なにせ船員が俺を含めて四人という現状に海図どころか“記録指針”すら無いときだ。億単位の悪名轟く海賊に三大勢力の影響で海賊の墓場とまで言われる海だ、まだ入るには時期尚早というものだろう。

「暫くはこの海を回るつもりだがな、資金も心もとなし色々必要な物もある」

ブチのアレで船が沈んじまったしな、いくら積んでたか分からんが非常に残念だ。

「そうですか……それで、いつ此処をお発ちになる予定ですか？」

ふっ、海賊に居座られちゃさぞや迷惑だろうしな……ま、心配することはねえ。

「安心しろ、船が直り次第この村からは出て行く。いつまでも居座るようなマネは」

「「えー!?!」」

へ？

「もっと居ろよ！　まだてめえから一本も取ってないんだぞ!?!」

「そうですよ！　それにまだ何も教わって無いじゃないですか!?!」

「いや、てめえらな……俺らは海賊だぞ？　それに俺が恐くねえのか？」

俺がその気になればドンチャン騒ぎのこの場が瞬時に血みどろの地獄に変わる、そんな奴に居座れとか正気か？　前世の俺なら裸足で逃げ出すぞ。

「過程はどうあれ、あなた方がこの村を護ってくれた事には変わりはありませんよ。恩人を追い出すような恥知らずなマネをする人は、この場におりません。」

コウシロウの言葉に力強く頷く二人……どうしたもんか。

「なにシケた所で飲んでやがんだキャプテン！ あんたらしくもねえ！！！」

ハイテンションにお立ち台から降りてきたジャンゴ、うぜえ事この上ねえ……悩みなんか欠片もねえんだろうなあ、こいつ。ナイーブな俺とは大違。

「坊主に嬢ちゃん！ よく見とけ！ キャプテン直伝のギャグ行くぜ！！ 小野」

い！？

「妹 ボハア！！？」

「失せろしましまキノコ星人！！！」

渾身の力で杯を副キャプテンの顔面に叩きつける。右手を膝に当てて力を溜めている状態で吹っ飛ぶジャンゴ、あれが解き放たれる前で助かった……これで俺の尊厳は保たれた。

「あ！ あんな所に居やがったぜキャプテン！！！」

「こつち来てくださいよキャプテン！ 皆あんたの話が聞きたいってうるさいんですよ！」

……やれやれ、色々と考えてた俺が馬鹿みたいじゃねえか。

「前言撤回だ！ この村は鍛錬にも丁度いい……“偉大なる航路”

に入るまでクロネコ海賊団の拠点に使わせて貰うとしよう!」

眼鏡をクイッと上げて言うと、すぐに笑顔になる二人。

「てめえらも付いて来い! 俺の恐ろしさを心底教え込んでやる!」

歓声を上げて付いてくる二人、どうにも決まらねえな。どうせ、俺にはハードボイルドなんか似合わねえよ、チクショウが。

「うおっしゃあ! 完璧じゃねえか!」

痛々しい継ぎ接ぎが消えた我が愛船、船首のクロネコちゃんも心なしか喜んでるように見える。

「村の英雄相手に半端な仕事は出来ないからな！」

胸を張る船大工、いい仕事してくれたもんだぜ！

「クロ！　ぜってえ帰って来いよ！　逃げるんじゃねえぞ！！！」

期日までにキツチリと仕事を終わらせてくれた船大工を労っていると、ゾロが見送りに来た。元気いいなこいつ、昨日あれだけ叩きのめしたのに。

「誰が逃げるかよ！」

ま、威勢がいいのは良い事だ。

俺は眼鏡をクイッと上げると、ゾロから背を向け船に飛び乗る。

海図に“記録指針”は裏のオークションに出品される事があると聞いたが、相場を聞くと経済状況が芳しくない現在じゃ少々手が出ない。と、いう事はまず船員探しからだ。

「帆を張れ！　碇を上げる！！！」

俺の指示にキビキビと従う我が船員、普段はアレだがやる時はやるのがクロネコ海賊団だ。生半可な奴じゃ航海の邪魔にしかならない、少数精鋭が俺の理想だ。

「出航！！！！！」

待っている！
“偉大なる航路”！！

第六話 金属バットの王様

姿見の前で仁王立ちする俺、今日は中々気力が充実しているな……よし、行くか！

「ガハハハハ！」

……イメージに合わない、ボツ。

「ハ―ハツハツハツハ！」

普通過ぎる、ボツ。

「ホ―ツホツホツホツホ！」

俺は笑うせえるすまんか？ ボツ。

「ヒヤハハハハ！」

小物臭しすぎ！ ボツ。

「ちい、まだまだか……！」

現在笑い声の試行錯誤中、この世界の實力ある海賊は皆独特の笑い声を上げていた。故に、オリジナリティ溢れる笑い声を考えているのだが……。

「やはりもっと、こう……俺の特徴を取り入れるべきだな。ふむ

」

俺「キャプテン・クロ」クロネコ「クロネコ海賊団」ネコ……。
ネコ！ これだ！！

「ニヤハハハハハ！！！」

会心の笑い声！ 一般的なネコの鳴き声を取り入れた斬新かつ繊細なこれこそ。

「……無いわ」

確か黒髭の仲間に語尾がニヤーな奴が居たような気がするし、なによりキモ。

「……つぶ」

！！！！

「ぶはははは！ ニヤってなんだよニヤって！ 気でも狂ったかキヤプ」

「忘れる、いいか？」

眼鏡をクイッと上げると、かつて無いほどの速度でく猫の手くを装着し、東の海一のバカの首筋に突きつける。

「お前は何も見なかった、何も聞かなかった オーケー？」

「い……イエス・キャプテン！」

首が振れないので震える声で言うジャンゴ、我ながら今のは寒気がするほどキモかった。故に、バラされる訳にはいかん。

「もう着いたつてのに、何してんですかお二方……」

「そうだぜ、とつと降りてメシでも食いましょう。俺はもうキャプテンと副キャプテンのメシは当分食いたくねえ、コウシロウんこのメシが懐かしいぜ……」

贅沢言いやがってこの野郎……まあ、仕方ねえ。取りあえずメシだな、それから船員探しを始めるでしょう。

シモツキ村を出発した我らクロネコ海賊団、今回はある程度大きな町をリストアップし、そこを巡ってめばしい奴を集めようって寸法だ。

この時代、海賊志望の奴なんて腐るほど居るが俺が目指すのは“偉大なる航路”、チンピラに用は無い。クリーク海賊団の例もあるし、入って早々七武海や億超えの海賊と遭遇する可能性もある事からある程度の実力者で固めておきたいのだ。

戦闘に入った瞬間覇気で全員腰砕けとか笑えないしな……。

ちなみに海軍基地の無い所を中心に回ることにした、理由は単純でヘタに交戦すると面倒だから。財宝積んでる訳でも無いしこちらにメリットが何も無い相手だ、極力戦闘は避けたい所である……しっかし。

「……大した奴が居ねえなあ、おい」

殺気込めて睨みつけただけでぶっ倒れて失禁とか……人としてどうだ？ これで名の通ったワルだっていうんだから、どうしようもない。腹いせに写真でも取って町にバラ蒔いてくれようか……。

「キャプテン、そっちは 言うまでもないか」

足元でぶっ倒れてる三下を見て溜息をつくジャンゴ、向こうも似たようなものか。

「こつちもダメだ、凄んだら全員逃げ出しやがった。これじゃあいつらにも期待は出来ねえな」

お手上げの様子ジャンゴ、やはりそう簡単に見つかりはしねえか。

この世界は、どんな奴でも努力さえすればある程度の実力は手に入る。コビーがいい例だが剋に覇気と超人になる事も不可能ではない……しかし、それには何より不屈の根性が必要。これぐらい耐えて貰わないとお先真つ暗だ。

「出来れば反撃して来るくらい、活きの良い奴が居ればいいんだが……」

「そりゃ高望みすぎじゃねえか？ あんたに睨まれたら海兵だつて逃げ出すぞ」

…… どんだけヤバいんだよ俺、しかしこの町はハズレだな…… ろくな奴が居ねえ。

「ここは諦めて次の町に期待するか…… 先に船戻ってるぞ、やる事があるんでな」

まだ笑い声が納得のいくモノになってないからな、早急に仕上げる必要がある。

「あいよ、それじゃ俺は町でもプラプラしてるか」

俺に並んで歩き出すジャンゴ、ムーンウォーク歩法は鬱陶しいからやめるとく猫の手くを構えて脅したら今度はロボットダンスな歩法を習得しやがった。一緒に歩くのが酷くハズいので普通に歩いて欲しい所だが。

「待てい！ 貴様、“無計”だな!？」

!？ だ……。

「誰が“無計”だコラア!!」

「いや、あんただろ……」

ジャンゴのツッコミを無視し、俺の禁断の二つ名を呼んだ愚者に生まれて来たことを後悔させてやろうと、あらん限りの怒気を発して振り返ると。

「……」

絶句する、なんだこの残念な生命体は。中世の貴族みたいな時代遅れの燕尾服に身を包み、二振りの金属バットをそれぞれ構え、そして……何をトチ狂ったのか王冠なんぞ頭に乘せている。ふと横を見ると、ジャンゴも啞然とした顔でそれを見ていた。

「ハツハツハツハ！ この威厳ある姿に声も出ないか“無計”！！」
悦に浸って体を逸らして笑う残念な男、見覚えがあるような気がそこはかとなくするが、きつと気のせいだろう、うん。

「てめえを仕留めりゃ俺の名も　へブツ！？」
悲鳴を上げて吹き飛んでいく残念な男、隙だらけだったのとなによりムカつときたの思わずミドルキックを入れちまった。加減はしたから死んではないだろうが暫くは動けまい、賞金稼ぎとしてそこそこ名が挙がって来た頃からああいう輩が増えて面倒な事この上無。

「熱血ナイン」

む？

意識を奪ったと思えば、高速でバク転を連続で決めながらこちらへ迫ってくる残念な男……加減しすぎたか？　しかし、アクロバットな技に金属バットの二刀流……なんか覚えあるな。

「根性バット”！！！！”」

中空から放たれる一撃、不規則な軌道で腰の捻りを加えたそれは以外に鋭く力強いが　少々遅すぎる。

インパクトの直前に抜き足で背後に回り、再度ミドルを放つ。今度

は確実に意識を奪えるくらいには力を込めると。

「ふんぬ!」

体を強引に捻り紙一重で俺の蹴りをかわすと、そのままバク転で距離を取り、バットを構える変態……中々の身体能力だ。てか、こいつって……Mr9か？ 顔は随分と若い動きがそのまんま過ぎる。しかし、まだバロックワークスなんか動いて無いハズ……それになんでこんなところにいるんだ？ ……ちと聞いてみるか。

「いい動きじゃねえか、何者だてめえ？」

眼鏡をクイツと上げて質問する。名のある奴を討ち取りたいって事は、この海で名を馳せたいか……または出世したいかだ。本編じゃ偽名すら名乗らなかつたし、素直に言えば加入前か未だ活動前。Mrを名乗れば言うまでも無いし、名乗らなければミリオンズかビリオンズってところだろう。さて、どう出る？

「ハッハッハ！ 俺の名はシャルルマーニュ！ いずれ王様になる男だ!」

高らかに宣言する変態、どうやら前者だったみたいだな。しかしシャルルマーニュで……カール大帝かよ、どんだけ大層な名だよこの野郎。

「王様……それで王冠か、しかし偉そうな名だなオイ」

ボソッと呟くジャンゴ、明らかに名前負けしてるしその気持ちはよく分かる。それにこの世界屈指のネタ技でやられたしな、こいつ。だがこの身体能力は捨てがたい、訓練しただいではかなり使い物にな

りそうだし……よし！

「決めたぞ！ ようこそ我がクロネコ海賊団へ！！」

腕を広げ、シャルルマーニュを迎え入れる俺に。

「「は？」」

ポカーンとする二人、シャルルマーニュはともかくなんでジャンゴまでそんな顔してんだ？

「お、おい！ 正気かキャプテン！ マジにこのアホを俺らの仲間に加えるのか！？」

「俺にビビらず反撃までしてくる逸材だぞ？ それにてめえのがアホだろ、どう見たって」

すぐに正気が戻り詰め寄ってくるジャンゴ、しかしもうこれは決定事項だ。さて、どのポジションに。

「ま、待て待てお前ら！ なに勝手に決めてんだ！」

ようやく我に返ったのかなにやら喚いているシャルルマーニュ、なにを今更。

「俺が決めたんだからてめえはもうクロネコ海賊団の一員だ、以後俺の事はキャプテンと呼ぶように」

「だから！ 勝手に決めるな！！」

なにが不服なのか再度バク転しながら接近してくる。もういいや、取りあえず船に乗せちまえば諦めもつくだろう。

「指銃<猫拳>」

打ちかかってきたバットを掻い潜って放った一撃が顎にキレイに決まる。

指銃の速度で打ち抜くパンチ<獣蔵>に捻りを加えた我流の指銃、ようは超高速の猫パンチ。戦闘にはほぼ<猫の手>を装着している為に使いどころがいまいち無いが、威力は中々のものだ。今度ニャーバン・兄弟にでも叩き込むとしよう。

「ジャンゴ！ そいつを頼むぞ！」

「……おう」

眼鏡をクイッと上げて指示を出すと、脳が揺れて意識を失ったシャルルマーニュを担ぐジャンゴ。その視線がなんだか同類を見るような輝きを放っていたが、きつと気のせいだろう。

「それじゃ！ カールの入団を祝って」

「『『『『『カンパニー！！』』』』』」

打ち鳴らされるジョッキ、始めはギャーギャー言ってた今回の主役も色々と言い聞かせた結果今や吹っ切れたのか笑顔で乾杯している。ちなみにシャルルマーニユじゃ長くて呼びづらいから、船長命令で渾名をカールにした。

「キャプテン！ 絶対俺は王様になってやるぞ！！」

超笑顔で宣言するカール、野望が大きいのは良い事だ。

この時代、革命の風が徐々に強く吹き始めている。それはドラゴンが煽っているのもあるが、それ以上に王国という支配体制及び世界政府自体に限界が来ているのだろう。

故に 成り上がるのは決して不可能ではない。

「おう！ やってみやがれ！」

笑顔で返し、ジョッキを煽ると眼鏡をクイッと上げる。

さて、まだまだ船員は足りない現状だし、この調子で見つからないものかね。

第六話 金属バットの王様（後書き）

Mr9の本名が分からなかったので王様っぽい名前を付けてみたり。年も出身地も分からなかったので適当に、深く考えないで頂けるとありがたい。

なんでこいつ？ というと割りと好きだったから！

第七話 クロの大冒険（前書き）

最近感想見ながらニヤニヤするのが楽しくて仕方ない……皆様
に感謝！

9 / 11 何と勘違いしたのかシャンクスの傷に関して超絶ミス！
一巻で既にありましたね、皆様申し訳ありませんでしたorz

第七話 クロの大冒険

クロネコ海賊団の朝は早く、朝日と共に起床し戦闘訓練を行うのが日常だ。“偉大なる航路”入りが目標の為その内容はキツく妥協は許さない、故に朝食が素晴らしくうまく食べられるのだが……。

「…………ぬう」

火が通り過ぎてボソボソしてるオムレツに若干焦げたパン、この辺はまだ許容範囲だ。問題はこのサラダ、胡散臭いドレッシングがかかっておりなんとも不安になってくる。

「…………副キャプテン、なんですかこのドレッシング？」

一口食べてなんともいえない表情を作るシャム、確かにそう言いたくなるよなこれ。

「特性キノコソースだ、いい出来だろ？」

…………これが？

「…………このスープもまた、アレですね」

ブチの言葉に、今まで目を逸らしていたブツを見る……………なんだよ紫色って。掻き混ぜると漂う胡散臭い香り、勇気を出して啜ると口内に摩訶不思議な味が広がった……………ナニコレ。

「こいつはちよいと失敗したな、塩が足りなかった」

……塩？ うそこけ、このスープに足りないのは常識だ。しかしジヤンゴは平然と食べている、こいつ舌がトリップしてんじゃね？

「お代わりはまだまだあるからな！ 食わなきゃやってられねえぞ！！」

上機嫌で言うとかツガツ食べたすジヤンゴ、味付けはアレだが材料には問題ないはずだ。実際腹はかなり減っている、塩や胡椒で味を誤魔化せばイケ無くはないはずだ……そして。

「……狸寝入りは感心しねえぞ、カール」

眼鏡をクイッと上げて言うと、船室の隅に寝かせておいたカールがビクツと肩を震わせる……まさか気付いて無いとでも思ったのか？ 体力づくりに今まで命綱付けて海を泳ぎ続けぶっ倒れていたカール、水中は体に余計な負荷がかからない為体力作りには持ってこいだ。悪魔実を食う前の俺や仲間になったばかりの頃のジヤンゴもニヤーバン・兄弟も経験しており、そしてぶっ倒れたものだ。

「お！ 中々タフじゃねえかカール！ 腹減つただろ、今大盛りで持って来てやるぜ！！」

嬉々として席を立つジヤンゴとは対照的に青褪めるカール、ためえ一人だけ逃がすものか。

「……キャプテン、取りあえずまともなメシ作れる奴入れないか？」

蚊の鳴くような声で呟くカール、それには賛成だが。

「まずそいつを片付けてからだ……」

きっかけはカール、資金調達をどうするか悩んでいたら宝の地図を持っていると言ってきた……なんでもとある海賊がここたま溜め込んだ財宝の一部を、地図に記された島に隠したらしい。

テンプレ過ぎて実に怪しいが最近処刑された海賊の名と一致するので、もしかしたらというのも考えられる。“偉大なる航路”にあえて入らず四つの海から略奪の限りを尽くした拳句、捕縛され処刑された海賊……さほど期待は出来ないが地図自体が比較的新しく、食費くらいにはなれば良いと思いついていると言っただ。

……ぶつちやけ手頃な村を襲撃した方が確実に金になるが、シモツキ村の一件でどうにも手を出しづらい。ガキの夢を壊すってのはどうにも。

「なに立ち止まってんだキャプテン、早く行かないと日が暮れちまうぞ」

「……」

考えを断ち切り、クイッと眼鏡を上げて目のいかにもな洞窟を見つめる。中は暗く構造はよく見えないが、この手の洞窟らしく下に向って道が伸びている。いかにもダンジョンといった風情で、宝を隠すにはもってこいなスポットだ。

しかし。

「……こういうシチュエーションで、キャプテンである俺が先行するっておかしくねえ？」

地図に記された小島に意気揚々と上陸した我らクロネコ海賊団、そこで待ち構えていたのは多数のデンジャーなトラップだった。当初はトラバサミ程度だったが、進むにつれ底に槍が仕込まれた落とし穴等級傷能力が上がって来ており酷く心臓に悪い。しかしこれだけ罠が仕掛けられているのだ、地図の信憑性はグツと高まったと言える。

「普通、こういう場合でめえらが先に行くべきじゃねえか？　なんで船のNO.1な俺が真っ先に突入するんだよ、色々違えだろ」

島内を散策した結果、この洞窟周辺の罠のレベルが他の所に比べて一段と高い事が判明した……恐らくこの洞窟に財宝が眠っているだろう。

「いや、けどよ……分かってると思うが、この中の罠は多分周辺とは比べ物にならないぜ？」

「そりゃそうだろう……でだ、てめえらはそんな場所へキャプテンを真っ先に突入させようなんて　思っただけよな？」

笑顔で頼りになる船員達を見渡すと一斉に目を逸らされる……こいつらあ！

「こ、ここは一番運動神経の良いカールが行くべきじゃねえか？」

「なぬ！？」

ジャンゴの提案に真っ青になるカール、体力的には不安だが確かに身体能力は高い。

「俺はまだ新入りだぞ！？ あんたが行けよ！！」

「俺は副キャプテンだぞ！？ こういうのは新入りの仕事だろ！！」
ギヤーギヤー言い合うカールとジャンゴ……アホどもめ。こりゃニヤバン・兄弟も連れて来るべきだったか？ あのコンビはこういうの得意そうだし……けど船番が居ないというのはマズいだろう、戻ってみれば船が有りませんでした、じゃどうしようも無いしな。

「ワン・ツー・ジャンゴでめえは洞窟に突入したくなる！ ワー
ン！ ツー！」

「そんなもの！ 見なけりや意味無いぞ！！」

ついに催眠術まで使い出すジャンゴに必至で目を逸らすカール、ど
んだけ嫌なんだよ。

「俺は別に二人で突入しても一向にかまわ オイ、泣くほど嫌な
のかよ……」

俺の提案に号泣する二人、道中散々畏に引つ掛かってカールは偉そ
うな燕尾服が所々千切れ飛んでいるし、ジャンゴは全体的に焦げて
いる。故に行きたくない気持ちは分からないでもないが……それで
キャプテンを突入させようとするか普通？ ったく、頼りにならね
え手下どもめえ！

「分かったよ！ 俺が行きゃいいんだろ俺が行きゃ！！」

背負っていた鞆から一応持つて来ておいた松明に火を灯す、なんでキャプテンが真っ先に行かにならんのだ。

「さっすが我らがキャプテン！」

「頼りになるぜ！」

……調子のいい事言いやがって、やれやれだ。

クイツと眼鏡を上げて洞窟へ突入する、こんなもんはビビッたら負け。

「うお!？」

足元から聞こえるカチツという不吉な音、本能に従いブリッジすると俺の首があつた所をギロティンが通過した……いきなりこういうのかよ!

立ち上がって後ろを振り向くと大きく口を開けて青褪めてる二人、なにボサっとしてやがんだ。

「なにしてんだ、こんなもん序の口だろ。さあ……逝こうか」

「嫌じゃあああ!!!」

洞窟内に二人の絶叫が響き渡った。

「まったく、ビビリ共め……」

泣き叫んで同行を拒絶するので結局一人で行くハメになった、腐っても海賊ならお宝の為に命の一つや二つ賭けるってんだ全く。あいつらには度胸が足りねえ、“偉大なる航路”のヤバさはここの比じやねえぞ。

「しっかし……」

眼鏡をクイッと上げて振り返ると、そこには俺が突破した数々の悪質な罠の残骸……酸の雨とか夕チ悪いぞ、掠った部分は斬り飛ばしたから傷は無いが一張羅が台無しだ。高かったのに……。だがここまでするって事は相当溜め込んでるって事だ、こりゃ期待

できるぞ……金銀財宝か、ロマンだよなあ。前世じゃ貴金属には欠片も縁が無かったからな、メシだってチンしたコンビニ弁当が主食だったし。

「よし、急ぐぞ！ 他の奴らに嗅ぎつかれる前にお宝奪ってトンスラだー！」

眼鏡をクイッと上げて歩を進める。なにしろカールでも手に入った地図だ、かなりの数が出回っているとみていいだろう。急がないと他の奴が乗り込んで来かねな。

ああああああああ。

ん？

「なんだ？」

突如洞窟内に木霊する……悲鳴？ 声質からみてあいつらのじゃ無いようだが。

ああああああああ。

「ち、近づいてくる？」

松明の火を消し鞆にしまうと、即座にく猫の手を構えて戦闘準備を整える。入り口の根性無し共はなにやってんだ！ この海の奴らじゃ、よっぽどの奴じゃないとあいつらは倒せないぞ？

「さては逃げやがったか……？ まあ、それは後に置いとくとして……」

……声と一緒になにかが転がって来る音が聞こえるのはなんでだ？
もの凄く嫌な予感が。

「ぎゃあああああああ！！！！」

「ちょー！？」

視界に入ってきたのは悲鳴を上げて猛スピードで逃げてくる麦藁帽子を被った男……そしてそれを追いかけるように転がってくるのは。

「い、インディ・トラップ！？」

某考古学者が主人公の映画で出てきそうな特大の大玉、道幅一杯ですり抜けるのは出来ず下り坂の為勢いが付きすぎて止めるのは無理……つまり。

「「ぎゃあああああああ！！！！」」

逃げるしかない。

「なんにもんだてめえ！　そして俺を巻き込むじゃねえ！！」

こんなベタな罠に引っかかりやがって！　コントじゃねえんだぞちくしょう！

「なんか踏んだらいきなり転がって来たんだ！　仕方ないだろ！？」

仕方なくねえよ！　クソ、このまま圧死なんて絶対にゴメンだ……とくれば。

「嵐脚！」

抜き足で距離を稼ぎ、振り向き様に放った蹴りが起こした鎌風が大玉に衝突し甲高い金属音が響く。

しかし、表面に傷がついたくらいで両断どころか勢いも変わらない。鉄製かよ、悪質過ぎるぞ。

「ちい！」

眼鏡を上げて再度麦藁帽子に並走する、やはり威力不足か。このようなりゃリンクス化して。

「中々やるじゃないかお前！ 俺と一緒に海賊やらねえか！？」

「寝言は寝てから言え！ つかてめえの撒いた種だろうか！？ なんとかしやがれ！！！」

この非常時にふざけた事言いやがって！

「うーん……お前、アレ少し止められるか？ そうすりゃなんとかなりそうだが」

「む……」

特に構えた様子も無く気軽に言う麦藁、しかし不思議と何とかしてしまいそうな雰囲気纏っている。

「逃げたら八つ裂きにしてやるからな！」

「分かってるさ！」

仕方ねえ、こいつに賭けてみるか。眼鏡を胸ポケットへしまい、全身に力を込める。

「能力者!?!」

驚く麦藁を尻目に、抜き足で前方へ大きく移動し、軽く息を吸い込み目標を見据える。行くぜ!

「嵐脚<削り節>!!」

脚が霞むほどの速さで嵐脚を連続で放ち、大玉の勢いを殺し徐々に押し返していく。俺のオリジナル六式、威力は通常の嵐脚に劣るが速さと手数に重点を置いている。リンクス化すれば威力も跳ね上がり、よくこれで敵船を削り節のようにしたものだ。

しかしこれはあくまで足止めに過ぎない、結局麦藁頼みなわけだが。

「ハア!!」

鞘を払い、上段に剣を構えると勢いよく振り下ろす麦藁。すると。

「うお!?!」

剣から衝撃波が放たれ大玉を真っ二つにする、なにそれ!?!
てか。

「んな事出来んなら始めからやれよ!!!!」

俺は力を出し惜しみする奴が嫌いなんだ！

「あれには少し溜めがいるんだ、いやぁ助かった」

暢気な口調で言う麦藁、ムカツクなこの野郎。

「そついや誰だお前？　そして俺と一緒に海賊やろう」

「今更だなオイ……そしてさつきも言ったが寝言は寝てから言えや」
名乗るときは自分からだろうが、礼儀を知らない野郎だな。まあいい、俺の名乗りに腰抜かすといいさ。

「俺はクロ！　いずれ“偉大なる航路”を含めたすべての海で名を轟かせる男だ！！」

ふはは、我ながら東の海程度の雑魚にや勿体無い程の良い名乗り。

「そつか！　よし、一緒に海賊やろうぜ！！」

「……………」

……人の話聞いてねえな、こんの腐れ麦わ　ん？　麦藁で…………。

「剣士…………？」

「おう、こつちには結構自信あるぜ？」

ニヤリと笑う麦藁、光源の無い洞窟なので今まではうつすらとしか見えていなかったが、リンクス化した事で夜目が利きその顔が鮮明に映る。左目に三本の傷が入った超見覚えのある顔に特徴的な赤毛……こ、こいつ！

「“赤髪”のリンクス!!?」

「お、俺の事知ってるのか？」

愉快そうに笑うリンクス……もう嫌あ!!!

第八話 ベタな結末

目前には笑う麦藁帽子を被った赤毛の男、“赤髪のシャンクス”。
海賊王ゴールド・D・ロジャーの元船員にして、未来の四皇。副船
長ベン・ベックマンをはじめに屈強な船員を揃え、個人でも剣豪、
“鷹の目”のミホークと互角の勝負を繰り広げる立派な化物だ。
……こりや、まずいな。

「……てめえみてえな大物がこの海になんのようにだ？」

＜猫の手＞を構えて油断無く見据えながら問う。先程の斬撃から見
るに俺より格上だろう……なにせ、俺は覇気なんて人外なシロモノ
は未だ習得していない。

「自分の船で冒険してみたかったんだ、それに仲間も欲しかったし
な……しかし珍しい武器だなそれ、どこで売ってたんだ？」

「……これは特注だ」

自分の船……か。こいつも伝説の船の船員だ、色々あるんだろう。
しかし、分かっているのかこの状況？

「俺は財宝を前に引く気はねえ………てめえは？」

「無いな、勿論」

ちい、こりや覚悟を決めねえとな……。原作じゃあの白ひげを前に
して一步も引かない化物だ、しかも未だ両腕は健在……ヤバ過ぎる。

「そんなペリペリするなよ、俺はお前とやり合う気も無いぞ?」

は? なに言ってたこいつ、引く気も無いしやり合う気も無い……じゃあどうするってたんだ?

「どうせ本当に財宝があるか分からねえんだ、共闘と行こつぜ」

「……ふむ」

悪くない話だ。確実に財宝がここに眠ってるなんていう保証はどこにも無いし、こいつとやり合うのは余りにもヤバ過ぎる……しかし。

「てめえに何の利益がある? 俺をここでブツ殺しや独り占め出来るぜ?」

鋼鉄の大玉を両断する程だ、こいつの本気がどれくらいか分からないが今の俺じゃ敵しいだろう。もっとも易々と殺られはしないが、いざとなれば顔の斬り傷増やして逃げてやる。

「なに言ってたんだ、たかが財宝如きで友達ブツ殺すわけないだろ」

「……いつから俺はてめえの友達になつたんだ」

なに言ってるのこイツ? みたいな顔をするシャンクス……もういや。

<猫の手>をしまいリンクス化を解いて、眼鏡をかける。こいつとやり合った所でどうせ俺の負けだ、それなら取り分は減るが共闘した方が幾分かマシってもんだらう。

「分け前は五分五分だ」

クイツと眼鏡を上げる、どんくらい溜め込んでるか分からんけどな。

「おう、それでいいぜ」

契約成立と握手する、妙な事になっちまったなあ……。

「“無計”のクロか、南の海にも名は届いてたぜ」

「……“無計”で広まってんのかよ」

クソ、誰がこんな不名誉な二つ名で俺を呼び始めやがったんだ。もつと色々有るだろ、色々。

「いいじゃないか“無計”、男らしいし海賊らしいと思うぜ？俺なんて赤毛だから“赤髪”だ、こっちのが微妙だろ」

おどけて言うシャンクス、“無計”より絶対“赤髪”のがいいね！
しかし……このまま名を上げて行けば全ての海に俺が無計画野郎
という認識が伝わっちゃう、ひでえ話だ。

現在二人でお宝目指して邁進中、ただ歩くだけだったので寂しいので
雑談交じりだ。話を聞くに、シャンクス率いる“赤髪”海賊団は今
まで南の海を拠点に航海しており、ある程度冒険し終えた所この
地図が手に入り東の海へやって来たらしい。

ちなみに、我が愛船ベザン・ブラック号と船員達は無事との事。抵
抗して来たので縛り上げたらしいが、それくらいは許容せざるを得
ないだろう……ヘタしたら俺含めて皆殺しにあつてたかもしれんし。

「そっぴやくロ、お前海軍にでも居たのか？」

「へ？」

突然なに言い出すんだこいつ？

「いや、お前の技つて海軍のヤツだろ？ この辺じゃ使い手は居な
いが、昔それと似た技使つてる奴が偶に居たからな」

「海軍には居た事無いが、あー……」

俺の基本的な戦闘術である六式、初登場字はCP9に伝わる秘伝的
なモノだと思つたが中将クラスにコピーまで使つてたからな……“
偉大なる航路”に行けば使い手も結構居そうだ。

まあ、ここは適当に言つとくか……眼鏡をクイッと上げ。

「昔、海軍がすげえ技を使うつて話を聞いてな……俺にも使えない
ものかと、修業したんだ」

これは嘘だが嘘じゃ無い、なにせ我流で実際に見たこと無いしな。未だに俺が使ってるのは六式なのか分からんが……あの荒行で身に付けたんだ、使い物にはなってるし名乗った者勝ちだ。

「修業ねえ……ま、いいか」

あっさりと流すシャンクス、大物なのかそれともただのバカか……いや、それを併せ持ってこそその“赤髪”なんだろうな。

「さて、ぼちぼちメシにしないか？ もういい時間だろ」

シャンクスに言われ、懐中時計を取り出し時間を確認すると確かにもう昼時だし、この洞窟へ入ってからアクロバティックな動作を繰り返した為か、腹も減っている。

「そうしよう、えーっと……」

周辺に罨がないか調べ、腰を下ろす。こんな辛気臭い洞窟じゃ美味しく頂けないだろうが、腹が減っては戦は出来ぬという言葉もある。空腹じゃ力も出ないし集中力も持たないので、妥協するしかないだろう。

「さて、頂きます」

鞆からお茶と弁当を取り出し、軽く手を合わせて食事開始。内容は日本の心、塩むすびと漬物の王様、タクアン、少し寂しいが手軽で食べやすく腹も膨れる。日本人ならこれしかないだろう、この組み合わせこそ弁当の原点にして頂点。

「なんだ、随分と寂しい弁当だなあ……肉っ気も無いし、そんなんで力出るのか？」

……余計なお世話だコノヤロウ。

コックの居ない我がクロネコ海賊団、食事は俺とジャンゴが交代で作ってなんとか凌いでいる。他の奴らよりはマシな物が作れるって事での人選だが、俺は普通に下手でジャンゴは似たような腕なのに独自の味を出そうと余計な手を出して、朝のような惨劇を巻き起す。

「これが分からないとは……シャンクス、お前は様式美といった物を理解していない」

眼鏡をクイツと上げ、お茶で口を潤して三角形というには余りにも歪なおにぎりを口に運ぶ。ちなみにこれは俺の自作。食事当番は一日毎に交代だが、冒険中にあのバッドトリップしそうな代物は口にしたくないと強引に変わった結果だ。

「様式美って……海賊なら冒険には海賊弁当だろう！ お前こそ分かってない！」

フォークで野菜の一切入れられていない肉々しい弁当を突きながら抗議するシャンクス、見るからに胸焼けしそうなメニューだが……軽く羨ましいなあおい！

実はオカズに卵焼きと唐揚げに挑戦したのだが、どちらも発ガン性物質の塊となって摂取するのは大変危険な状態と化した。

……ちくしょう、これが海賊の格の差だと言うのか……！

「やっぱ弁当はこれに限るな！ 力は付くしなにより美味しい……！」

笑顔で非常に美味そうに肉を口へ運ぶシャックス……くう！ ま、負けるものか！

肉への欲求を断ち切ろうと塩むすびを次々に口内へ放り込む。いい加減な塩加減の為に、物足りなかつたりしょっぱかつたりするが……これはこれで美味しいなによりコウシロウ自家製のタクアンが秀逸だ。絶妙な漬かり具合が食欲を増進させ塩むすびのグレードを上げている。見た目には劣るが俺の弁当の方がレベルは上だ！！

「ごちそうさま」

自らの力となつてくれた食材に、手を合わせて感謝を捧げる。これで後半日は戦えるぜ。

「うお、速えな！」

食い終えた俺を見て、慌ててガツつくシャックス。ふはは、我が弁当は速さも兼ね揃えているのだよ！

「ふう、食った食った。よし、行くか！」

弁当を片付け、満足そうに立ち上がるシャックス。く、悔しくなんかないんだからね！！

若干不満気味の食事を終えて冒険を再開、相変わらずの嫌味な畏へ少しづつ対処が出来るようになった所でそれに突き当たった。

分厚い鋼鉄で閉ざされた扉、もう続く道は無い事からお目当ての財宝は恐らくこれの向こう側という事だろう。
しかし。

「うーむ……」

押そうが引こうがビクともしない扉。調べたら鍵穴らしき物が見つかったが、勿論鍵なんて持ってない。

どうしたもんかなあ……前世で住んでたアパートは針金突っ込んで適当にガチガチャやれば開いたもんだが、これじゃそうは行かんだらうし……。

「ちょっと退いてろ」

「ん？」

剣を振り上げ上段に構えるシャンクス。すると、構えた剣にナニカが籠められていく。鉄の大玉を両断した時と同じ力、ついでに言えば憎きガープの拳にも似て。

「ハッ！」

振り下ろすと、籠められたナニカが斬撃と共に放たれ扉を両断つて!?

「おいおい……」

ガッツポーズをするシャンクス……すげえな、覇気。こいつを一発かよ……こりゃ無理だ、もし敵対してたら軽く全滅してたな。

「どれどれ……」

剣を収め、中へ踊り込むシャンクス。

おっと呆けてる場合じゃ無い、乗り遅れてなるものか!

「こりゃすげえ!」

歓声を上げるシャンクス、次いで中へ入るとそこには松明の明かりを受けて輝きを放つ金銀財宝。
すげえ……マジにあつたよ。

「どれ……」

クイッとメガネを上げて、試しにと袋に詰められた金貨を一つ手に取り、埃をさっと払って口に銜え思い切り歯を立てる。

「……純金か? この袋一つで相当な額になるぞ……」

くつきりと残った歯型、それがこの金貨の純度を示している。金という物質は柔らかく傷つきやすい。よく聞く18金、24金というのは混ぜ物の含有量だ。

……つつても専門家じゃないからよくは分からん、ただ純金じゃ無くても価値はあるだろう。そんなものが、周囲を見渡すといくつも無造作に置かれている。

……これだけでも相当な価値があるが、無論それだけではない。他の貴金属に各種美術品、正確な価値は分からないが少なくとも資金難はこれで解決に間違いない。

……正直カールが持ってきた地図だし、ここまで期待してなかったんだがいい裏切られ方だ、うん。さて、他には　お？

「これは……？」

豪華絢爛な財宝の山の中に埋もれている黒いナニカ、引きずり出してみると刀だった。

海賊・海軍問わず剣術の使い手は多く、名刀の類は高額な値が付きやすい。故にここに刀があるのはそれほど変なことではないが、それにしても随分と飾りっ気が無い。

何の変哲も無い、黒く塗られた鉄拵えの鞘に鋼鉄製の鏢……細工の類も無く随分と無骨だ。

もしかやこれらを隠した海賊が忘れてった物か？　まあ、取りあえず抜いてみよう。刀の目利きなんてスキルは持って無いが、錆付いて無きゃそこそこの値で売れるだろう。

サーベル等に比べて刀は製作に段違いの手間と時間が掛かり、それ故に値段も高い。粗悪な数打ちでも同レベルの刃物よりは高く、結構な金になる。賞金稼ぎ時代はよく敵船から奪った奴を売っ払ったもんだ。

「どれ ツ!？」

肉厚の刀身に刃紋の一つも無い直刃、だが……なんとも言えない凄味がある。くいなに見せてもらった和道一文字とはまた違う何か、畏怖すら覚えるものをこれは発している。

俺は剣なんて使えないし使う気も無いがそれでも魅せられる、いたいどんな想いを持ってこれを鍛えどんな剣士の手に渡りどんな敵を葬ればこうなるものか……。

「大業物21工の内の一振り、破軍。随分と良い物を見つけたな、売れば1000万ベリは軽く超えるぜ？」

ひよい つと横から覗き込んで鑑定するシャンクス。

「破軍……」

大業物かよ、凄い刀だとは思ったがそこまでとはなあ……しかし、大業物と来たからには頂戴しにくいな。なんかこう、俺の琴線に触れるものがあつたというか、俺はこれを気に入った。

けどなあ……俺の船員共に刀使いは俺も含めて居ねえからなあ、勿論売る気はねえがコレクションとして貰うってのも。

「随分そいつにご執心だな、そんなに気に入ったんならそつちの取り分でいいぞ？」

なぬ!？

「いや!確かに気に入っちゃいるがこいつは大業物だぞ!? んな簡単に……」

どんだけ太っ腹なんだよ！ 使い手によっちゃそれこそ恐ろしい事になる代物だぞ！？

「勿論タダって訳にやいかねえよ、変わりといっちゃなんだが。

ニヤリと笑い灯りを向ける、すると妙なブロンズ像が目に入ってきた。クドい程余すことなくピツシリと筋肉の付いたマッチョ過ぎるボディの上に、無駄に彫りの深い胸焼けしそうなフェイス……。なんて悪趣味なブロンズ像だ、これがなんだって言うんだ？

「あいつを貰うぜ！」

「ッ！？」

正気か！？ あんな、ストレートに言えば気持ち悪い物貰ってなにが楽し　ハ？

まさかこいつそっちの趣味が……。

「？　なに後退りして　ってお前勘違いしてるな！？　ちげえよ！　俺が欲しいのは下じゃねえ！　よく見る！」

シャンクスに像の前まで引きずられる、どんだけ必至なんだよ。しっかし……うゝわ、超笑顔だよ。アレか、この濃ゆい笑顔に一目惚れってやつか？　そんな趣味の欠片も無い俺だ、だんだん気分が悪くなって来て顔を逸らすと。

「だ　！　ちゃんと見る！！！」

後頭部を掴まれ視線を固定させられる。

なんてことしやがるんだこの野郎！　まさか俺の高純度のクリスタ

ルの如く澄み切った眼球を腐敗させる気か!?　なんて陰険　　つて、こりゃあ……。

「王冠?」

眼鏡をクイツと上げ像の頭頂部を凝視する。

インパクトの有りすぎるボディとフェイスに目を奪われ死角となっていたその上、つまり頭に王冠が載っていた。

煌く白金に様々な宝石が散りばめられた一品、普通真っ先にこいつが目に入りそうなもんだが……恐ろしい、なんて像だ。

「一通り見たが、お前のそいつを除けばこいつが一番価値が高い。どうだ?」

ふむ、良質に見える白金によく研磨された宝石……正直惜しいがこは妥協すべきだろう。ここでこいつも欲しいなんて言い出したら、それこそ一戦交えるしかない。

「分かった、他の物は……運び出してからだな」

結構な量があるし、二人じゃ一度で運び出すのは難しい。一度戻って船員共を連れてもう一度来るのが妥当だろう。

「おう、それじゃ取って来るぜ」

そう言うと跳躍し、像の肩に着地して冠に手を伸ばすシャンクス。能力を使えば別だが素の状態だと身体能力的には互角……いや、俺のが下か。思えばあのベタなトラップに追い回されてる時も息を切らして無かったし、その辺は流石未来の四皇といった所だな。まあ、あれに引っかけたつてのはよろしくないが。

「よし、いただき　　っとうお!？」

冠をはずすと突如揺れだす地面、それに驚いて像の濃いフェイスに抱きつくシャンクス。地震か？　しかしこれでも前世は日本男子、地震大国出身を舐めるなよ？　おかしも、を厳守すれば怖いものなど　　って随分と長いな。つか、段々と揺れが激しく　　。

「こりやまずい、逃げるぞクロ！」

軽やかに像から飛び降り、金貨の詰まった袋を一つ掴むと駆け出すシャンクス。

おいおい、たかが地震でこれを放棄するのは　　って待て、これってマジで地震か？

不審に思い周囲を見渡すと壁に亀裂が入り始めている。この程度であんな事になるか？　まるで部屋自体が壊れ始めているようなっつて！

「それだ！」

なんてベタな仕掛けを……！　しかしこの一室に入ってからには特に仕掛けなんか無かったぞ？　一体何が原因……って、それどころじゃ無いな。急いで脱出せねばお陀仏だ。

しかし、俺の眼前には財宝の数々。心情的には金貨一枚・宝石一片たりとも残して行きたくは無いが、物理的にそれは不可能だ。

「もう時間も無えみたいだな……こうなりやヤケだ!!」

もはや罫は天井にまで達しパラパラとその欠片が降って来ている。俺は眼鏡をしまい、リンクスへと体を変化させて財宝を睨み付ける。

「行くぜ……」

両腕をダラリと下げて、左右に揺らす。

一往復する度に薄れていく感覚、それが意識にまで達しようとした瞬間に技を解き放つ。

「杓死」

「ふ、副キャプテン！　ありゃヤバくないですか!？」

「……またキャプテンがまた何かやらかしたんだろ、いつもの事だ」

慌てるカールに悟ったような表情で鳴動する洞窟を見つめるジャンゴ、ちなみに二人とも縄で縛られて転がされている。洞窟へは入らなかった二人だが、せめて出て来たキャプテンを出迎えようと入り口で陣取っていたのだが、恐ろしく強い麦藁帽子を被った赤毛の剣士にやられてこうなったのである。

「苦労してるな、そつちも」

ライフル銃を背負った銜え煙草の男が同情する。その視線はどこか同類を見るものだった。

「そつちもつて お？」

一体何があったのか聞こうとした所で、洞窟から見覚えのある麦藁帽子の男 赤髪のシャンクスが飛び出してきた。

「ふう……待たせたな！」

一息つくと片手を上げるシャンクス、すると周りに居た海賊達が一斉に歓声を上げた。

「お疲れッスお頭！」

「うお、イカした冠じゃねえですか！！」

「おう、本当はこんなもんじゃ無かったんだがちょっと事故があったな！ つと、道を空けてくれ」

自分の元へ一斉に集まった手下を遮ると、彼はカールとジャンゴの前で背を屈めた。

「お前らがクロの言ってた奴か！ 縛り上げちまって悪かったな」

笑顔で言つと、愛剣を振るって二人の縄を断ち切った。

「やっと自由になったぜ！ やっぱ王様に縄は似合わねえな！」

「やれやれ……所でキャプテンはどうした？」

縄から開放されはしゃぐカールとは対照的に、ジャンゴは軽く身構える。

「おう、多分俺の後ろに　　って、あれ？」

そこで洞窟に目を向けるが、お目当ての人物が居ない。その間にも洞窟の揺れは酷くなり続け、今にも崩れそうな様子だ。

「なにしてんだあいつ！」

「ヤバイ！」

今まで背負っていた袋を放り出し、洞窟へ戻ろうとするシャンクスに即座に立ち上がり走り出すジャンゴ。
しかし。

「お頭！　もう無理だ！」

「見れば分かるだろお頭この野郎！」

彼の手下がそれを押し止め。

「死んじゃいますよ！　もう無理ですって副キャプテン！！！」

「うるせえ！　離しやがれカール！！！」

洞窟に突撃しかけたジャンゴを、カールが羽交い絞めにしてなんと

か押し止める。

そんな事をしている間にも揺れは一層酷くなり、ついに崩れ落ちそうになった所で。

「ッダア！！」

何か異様なモノが洞窟から飛び出してきた。

両脇に大きな宝箱を抱え、背中にはシャンクスが持ってきた袋をいくつも背負っており、さらに、いたるところに装飾品の類を身に付けた 黒猫人間が。

それは、崩れ落ちる洞窟をバックにジャンゴ達の居る所まで疾走すると。

「ゴホツガフツゲフツ……ぐふ」

突如咳き込んで、崩れ落ちた。

「きゃ、キャプテン！！？」

そのあんまりな様に、二人は仲良く絶叫した。

第八話 ベタな結末（後書き）

ものっそい間が空いてしまった、申し訳ない。ちょっと忙しいので
次も遅れるかもしれませぬorz

質問が多かった原作の年代については、10年くらいをメドにして
ますが割と適当です。何分原作の後付設定が多いので、この辺細か
くするとどうしようも無いのでご了承を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3353n/>

がんばれクロネコ海賊団

2010年11月13日04時54分発行